

【目的】 キリスト教三大宗派の一つである東方正教会の典礼で聖職者が着装している衣服＝祭服はそれぞれの時代において最も高価な布地を使用している。それは聖職者が己の人間性を隠しキリストの変容として典礼の中で表現されるためであり、信者の側からは、聖職者に豪華かつ荘厳な着装を望む気持ちが込められている。そして祭服の色相は重要な意味をもって定められており、色相は主に、金・銀・赤・青・緑・紫・白・黒の8種類に分類され、それぞれの使用は典礼の種類・時期によって異なる。本研究では祭服の色相の意味を調査し、併せて祭服の初期（ビザンティン帝国時代）の色相について歴史的な考察を試みた。

【方法】 日本・ギリシャ・ロシアでの実態を把握し、イコン（東方正教会における宗教画）に描かれている祭服を着装している聖人の年代と、イコンの製作年代により歴史的考察を行うとともに、ビザンティン帝国時代の写本の挿し絵・聖金ロイオアン説教集・聖人伝・聖書なども資料として調査を行った。

【結果】 イコンおよび聖金ロイオアン説教集などから東ローマ帝国初期（4世紀頃）における祭服の色相は主に白色系であったことが推定される。